

学びの共同体佐藤雅彰先生学校訪問全教室公開授業研究会



〈校内研テーマ〉 互いに学び合う授業の創造
～ 聴き合い・かかわり合い・支え合う授業づくりを通して ～



午前中、全教室の授業を参観する。私と教頭先生で案内するが、村内や他校の先生方も同行した。5校時には焦点授業(2年算数)を設定し、日常の先生方の授業改善に向けて研究を共有し深めていった。

(K:教師 子どもの名前は仮名)

[1年] 算数 たし算:加法の計算能力を伸ばす



授業開始から2分、授業者はすぐにペア活動に下した。

K:答えが12になるたし算のカードを見つけてごらん。

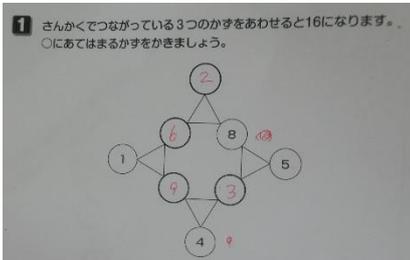
子:イスだけを寄せて友達と確認し合う。

先生の言葉で題意を理解できなかった子どもも仲間からの説明(対話)で理解し解決に向かう。



1年生のくつつき具合に佐藤先生も絶賛。躊躇なく、自然に、当たり前子ども達が「聴き合って」解決に向かっている姿に日常の授業経営に確信を抱く。佐藤先生の言葉を借りるとまさに小学校低学年の「べっちょり型」の授業風景である。さらに、フツフツ、ボソボソ聴き合う中で私が確認できたのは、この教室ではなぜか「弱い子ども達が堂々として」聴き合っていることである。「どういうこと」、「できない」、「分からない」仲間は簡単にあきらめない、いろいろな言葉で「困っている仲間」に言葉を送る。授業者は辛抱強く子ども達のやり取りを見守る。子ども達が自分たちの力で解決に向かう意思が尊重される。

[ジャンプ問題]



ジャンプ問題が出された。右写真、夢中になって解決に向かうペア。簡単ではない、だから夢中にならないと解けないのである。

どれほど脳に汗をかいただろうか。

「なんで?」、「どうして?」フツフツ交わされる対話には「分かりたい」「やりとげたい」子ども達の意味がはっきりとかがえる。主体的探究は「対話」の中で生まれ深まる。



[くいな・せんだん学級(特別支援学級) 自立活動:「国頭村のよさを伝えよう」



インクルーシブ教育、合理的配慮、バリアフリーユニバーサルデザイン、ノーマライゼーション、近年様々な言葉が教育現場に下されてくるが、その目的や意義をしっかり学校、教師、保護者が理解し子ども達に還元していきたい。支援(配慮)を要して様々な学校生活(学習や活動)に適應していくが、その困難さは、子ども一人ひとり課題や「困り感」に差がある。支援学級では子ども一人ひとりの個性を踏まえての多様な支援(モノなど)を準備し、子ども達の学校生活への参画を促し社会性を育成することを念頭に置いた指導が大切にされなければならない。9月に東京から転入してきた仲間がいる。国頭村の良さ(いいところ)をみんなで探し地域理解を深めることを意図とする授業である。国頭村のパンフレットやいろいろな資料から「よさ」を見つけみんなで共有する。右写真、教室のモノが分かりやすく整理されている。これもインクルーシブ、ユニバーサルの基本である。大切なことは「彼らが分かりやすく」である。



国頭村の良さ(いいところ)をみんなで探し地域理解を深めることを意図とする授業である。国頭村のパンフレットやいろいろな資料から「よさ」を見つけみんなで共有する。右写真、教室のモノが分かりやすく整理されている。これもインクルーシブ、ユニバーサルの基本である。大切なことは「彼らが分かりやすく」である。

[3年] 外国語活動 色や形の身の回りの物を

外国語活動「第1目標」

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通してコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する。

- (1) 外国語を通して…体験的に…違いに気づき…基本的な表現に慣れ親しむ。
- (2) …簡単な事柄について…聞いたり話したり…自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。
- (3) …文化に対する理解を深め…主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする…。

2020年これからの日本、「異文化共生社会」に向けて、現在の子ども達に身につけさせておかなければならない資質と能力がある。近年の国内のグローバル化社会における「異文化理解とコミュニケーション能力の育成」その重要性和学校課題を反映させた教育課程である。

英語科の目標(2)話すこと[やりとり]、(3)話すこと[発表]アイウにおいて基本的な表現を用いて話すこととある。つまり3・4年ではペアワーク、グループワーク、の形態でのアクティビティを通して慣れ親しみコミュニケーション能力を育成することが前提となる。

授業者のYR先生、前年度から何度も授業を拝見させてもらった。親しむ・慣れる・コミュニケーションにこだわる教師のポリシーを感じる。子ども達がほんとに楽しそうに参加する授業である。ICTを使ってビジュアル化された教材を駆使し、子ども達の理解を助ける。導入ではアルファベットをペアで並べ、ゲームの要素を取り入れ歌いながら慣れ親しんでいった。さらに本日は形と色を使ってモノを表現することに挑戦。授業デザインのテンポもよく、子ども達が前へ前へと進もうとする姿が素敵な授業でした。

授業観察から5分ほどたったとき雅彰先生がわざわざ私の耳元で一言つぶやいてくれました。「教師と子ども達の関係性がいいから安心できますね。」以上。



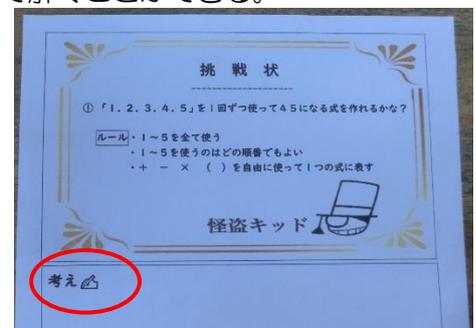
[4年] 算数 計算きまり：計算のきまりを活用して、計算を工夫して解くことができる。

この教室の子ども達のつながりが強い、「聴き合い・支え合う」が子ども同士の中で「分からなければ友達に訊く」が通常化している。

いろんな条件のもと、様々な計算の立式ができることを共有し、ジャンプ課題(右写真)が下ろされた。問題のレベルはかなり高いが子ども達の興味と関心を引き付ける工夫がプリントに施されている。うれしいことは問題文の下に、式、答えではなく「考え方」が記されていることである。この「考え方」のプロセスが大事な学習要素であることを知っておきたい。

「なぜそうなるか」対話による説明で互いに聴き合う。対話による学びとは、単純に「わからないこと」を聴き合うことであると言ってもいい。教師主導型一斉授業では、教師は「できた人」の声を拾って授業を展開・進行するが、学び合う授業では「分からない子ども達」が「分かるようになる」ことが主役を演じることになる。

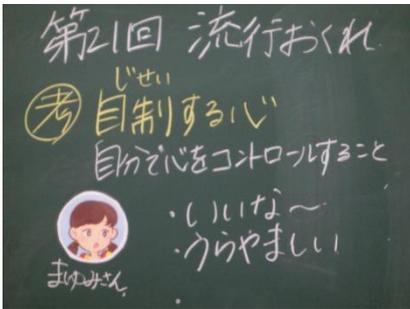
下の写真、身を乗り出して聴き合う男の子達、その傍らで黙々と脳に汗をかき鉛筆を走らせる女の子がいる、学び合う教室の風景である。下右の写真、まったく題意も理解できていない男の子だったが、いつの間にか、女の子のプリントで私に説明してくれた。本日の授業のファインプレーはこのジャンプ課題ではないかと考える。ジャンプ課題のレベルは「できそうでできない」が最適である。



[5年] 道徳科 内容項目：自制する心 資料「流行おくれ」

初任者である。教職に夢と希望を抱き、県の採用試験の難関を突破し、令和2年度より本務として本校での教職経験が始まる。何度か校内での授業研が指導教諭と管理職の見守りの中実施されてきた。初任者研修は多忙を極めるが、これからの教職経験の積み上げには絶対に必要な研修であり、不可欠なものである。

逆に初任者研修がない時、指導教諭も存在しないとき、いったいどうやって授業や子ども達と向き合っていたのだろうかと思像するだけで不安に陥る。



授業デザインシートの[授業者より]の言葉がある。

- ①教師がしゃべりすぎない。
- ②話すスピード、間を取る。
- ③ペアやグループで話し、自分の考えを深める。
- ④聴き合うこと。

授業者の決意である。授業形態はコの字型、可能な限り教師は座って子どもの反応や、表情を伺いながら授業を進める。コの字型も、座って対話することも私にとって初めてである。この学校ならではの経験も、私の教職経験の糧にしていきたい。「教師たちの挑戦」である。焦らずゆっくり、同僚の仕草や言葉から学んでいってほしい。大切なことは謙虚に、真摯に授業と子ども達に向き合うことである。



[6年] 国語 漢字の広場 異字同訓について

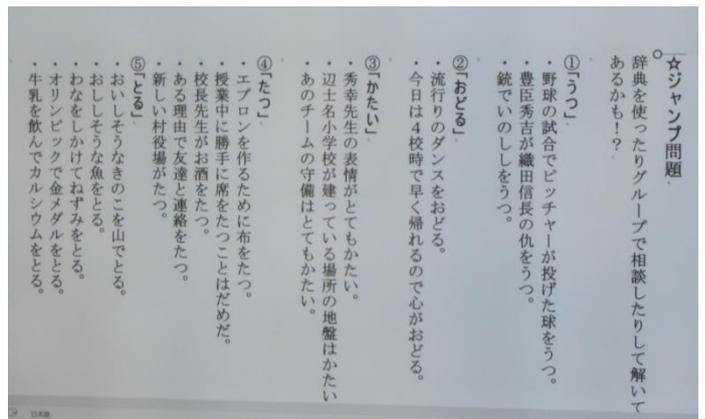
本校3年目の教師であり、本校の授業スタイルに少しずつなじんできた頃である。学年には学年カラーがあるというが、その集団の特性は、様々な個性の個人の集合体として形成される学級員互いの影響度が反映されると考える。様々な支援を要する子どもがいるが、「すべての子どもは、何らかの支援を要する子である。(西郷孝彦)」という見方もできる。切実にその言葉を感じたいクラスである

私たちの参観は授業の後半で、ジャンプ課題に取り組んでいた。辞書を使ってグループで解決に向かっていった。賢いグループはすぐに役割を分担し合理的に解決に向かっていく。分からない語句は辞書で引く

が、解説された言葉の意味がまた分からない「仲間に訊く」それから書く。その反復が繰り返される。調べる→訊く→書く。

左の写真、黙々と辞書に向かい調べる。

調べてまとめるという一連の学習だが、単なる個人作業の共同化は避けたい。対話による思考力と判断で揺さぶりたい。



【一見いいように見えるが?】

左写真、夢中になってタブレットで調べる二人。一見いいように見えるがこの瞬間は先生の話聴いていなくてはならない瞬間である。切り替えの困難な個性を受け入れるしかないのだろうか。右写真、仲間が集まってポソポソ、これもいいように見えるが、グループの基本としてグループ内での協同解決にこだわってほしい。協同解決は都合のいい仲間で行われるものではない。もう少しグループ解決にこだわりたい。



佐藤雅彰先生公開授業研究会焦点授業

11月10日(火)

2年算数 かけ算

授業者 : TA 先生

(K:教師 子どもの名前は仮名)

本時のねらい:単元の学習の活用を通して事象を数理的にとらえ論理的に考察し、問題を解決する。

[導入]:「賢い教師は導入にエネルギーを注ぐ。」授業開始から5分がゴールデンタイムである。



授業者が準備したのは子ども達の大好きな雪見大福のアイスクリームである。DTVに映し出されると子ども達は画面にくぎ付け。

K:先生、開けてパッと見てすぐ「あっ何個だ」って分かったの、

先生どうやってすぐ「何個」って分かったと思う → ペアへ

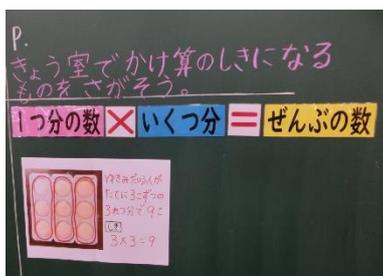
既習学習の確認をペアでの対話に下した子どもの関心を一気に学習テーマにつな



いだ。右の写真、子ども達の対話が加速する
りゅう:2, 4, 6, 8, 1つ・・・9個
れんと:たてと、よこに3つずつだから9個
「 $3+3+3=9$ 」、
きよか:3つのまとまりが、3つだから9個
「 $3 \times 3=9$ 」



[展開] K:二人で1台のタブレットを使って写真を撮って説明しましょう。



子ども達はペアになって教室、ローカまでをかけ算で表せる場を散策する。

撮影した写真を説明の言葉を書き加えて加工する。

タブレットがまだ不慣れな友達に丁寧に使い方を

教えているペアもあった。交互にペンを譲りながら持ち、仕上げているペアもあり心なむシーンがあった。

タブレットやホワイトボードをグループやペアにあずけるときは、一人の子やいつも決まった特定された個人に独占されないよう気をつけたい。



[共有(終末)] 教室の中で見つけたかけ算を紹介する。



タブレットをDTVに反映させて説明する。算数用語に躓きながら何とか皆に分かってもらう。

右写真、子どもの発表の後授業者が説明を付け足す。というより子ども達の伝えたことを整理してあげる。満足げな表情が浮かぶ。

[ジャンプ問題] 子ども達に勝手に気合が入る。「よ〜し!」



《問題》

つるは足が2本あります。カメは足が4本あります。つるとカメが合わせて5ひきいます。足は全部で16本あります。

つるとカメはそれぞれ何ひきずついますか。



「先生早くやろうよ」、ここでも意欲満点に解決に向かう。教室中がブツブツ、ボソボソに染まっていく。「分からないことは訊く」は、分かりたい自分があるから訊くのです。

TA先生、焦点授業ありがとうございました。素敵な子ども達です。微笑ましく安心して見ていられる子ども達です。ペアでの対話や、課題解決(ジャンプ問題等)でのやり取りはほんとに素敵でした。ジャンプ問題でなな子さんに訊かれたしょうさんが、「まずは、つるとカメの足をかけ」と言ったアドバイスに、素直に応じて書き絵を見ながら解決に向かっている姿が印象的でした。素敵な授業に心より感謝します。(国頭学びの会ゆい)